

## 上山高原エコミュージアムの取り組みと課題

\*小畑和之<sup>1</sup>

### Activities and problems of Ueyama Highland Eco-museum

\* Kazuyuki Obata<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Specified Nonprofit Organization Ueyama Highland Eco-museum, 757-1, Ishibashi, Shinonsen-cho, Mikatagun, Hyogo Pref. 669-6953, Japan

\* E-mail: ueyama-eco@yumenet.tv

### 上山高原の思い出

私の生まれ育った新温泉町奥八田地区の住民にとって上山高原は宝の山であった。どのような意味で宝かという、採草地、生草、干し草、それから放牧である。周辺では炭焼き、薪取りをしていた。炭は大変なエネルギーを生み出す産業であり、売上がかなりあったと思うが、今は炭をほとんど使わずこの辺りではプロパンガスを使っている。

草は牛の飼料だった。耕運機が入ってくる少し前は、牛の販売価格が大変高かった。私の家でも当時は牛を飼っていて、新温泉町湯村に市場があった。たしか昭和29年（1954年）頃の私の家の子牛の値段は38,000円であったと思う。これは、例えば当時の公務員の月給10何月分に相当すると思う。ところが、牛を売った私の父親は安いと言ってがっかりした。私の同級生の家では、2年連続で28万円とか29万円で牛が売れたという話があった。

私が初めて上山に上ったのは、小学校3年生の遠足のときである。私の村では上山とは言わず、「えーの山」と言った。石橋地区から登る道と青下地区から登る道の合流点のところで遠足の集合をしていた。当時の遠足は中学校も一緒だった。小学校3年生から中学3年生までが一緒に、小学校1年生、2年生は小さいから一緒ではなかった。それぞれの村で、年長者がうまく仕切って上ったように思う。

初めて見る上山の印象は、一面灰色の世界であった。遠足が5月27日と決まっておき、山を焼いた後に登るからである。この地方ではコシズと呼んでいる、細いわらの縄で編んだかごを皆が背負って、その中に弁当を入れて、ワラビを折りながら三角点を目指した。適当に何かで束ねてワラビをコシズに入れて持って帰っていた。山焼きでは、年によって2日、長い年には3日ぐらい燃えていた。裏山だから、夕方はパチパチという音とともに林の中が赤く染まって燃えている様子が見える。下に燃え移ってこないかなと思うときもあったが、燃え広がったことは一度もなかった。ちょうどブナが並んでいる所、つまりブナの前線で火が止まる。草が生えているところだけが燃えていた。

秋には牛を連れて上った。朝上って、夕方帰ってくる。登ると炭を焼いたり、相撲を取ったりして遊んだ。牛を連れて上った場所より少し高い場所は、今のような針葉樹の緑はほとんどなかった。私にとっての上山の景色は、ところどころにポツポツと自然に生えた杉の木があるだけで、あとは赤と黄色の絨毯を敷いたような感じであった。それら当時のことを思いながら、現在は草原化やブナを植える取り組みを進めている（図1）。

### 上山高原エコミュージアムの立ち上げ

上山高原エコミュージアムが設立された経緯は次の通りである。昭和28年（1953年）前後にこの地域に上山開発促進協議会が発足し、町や兵庫県へ観光開発の陳情を繰り返して、平成6年（1994年）前後に土地を兵庫県に売却することになった。石橋、海上と岸田、田中、青下が入会権を持つ林野の面積は非常に大きく、造林もしていた。それらを一切含めての売却だったのでかなりの金額が地元に入った。しかし、売却した後に上山をどうしようかというときに、阪神淡路大震災が発生した。また、先行して観光開発したところは軒並み経営不振に陥っていた。今さら真似をしても駄目だということで自然保護、自然再生という方向に決まった。兵庫県とそれから学者の先生方をお願いして協議をし、平成13年（2001年）にNPOをつくるための準備会をつくった。

<sup>1</sup> 特定非営利活動法人上山高原エコミュージアム  
669-6953 兵庫県美方郡新温泉町石橋757-1

\* E-mail: ueyama-eco@yumenet.tv



図1. 春先の上山高原の山頂（左）および秋の上山高原（右）。

おもしろ昆虫化石館の事務室の一角にパソコン1台だけをおいて3、4年過ごしたが、当局にもご尽力をいただいで、ちょうど統廃合になった八田中学校の跡を利用するというので校舎を改造していただいた。1億3,000万円ぐらいの費用がかかったように聞いている。国、県、町が各3分の1ずつ負担して出来上がったということである。ただし、青下や海上にある附属施設は、地元も少額であったが負担している。

現在事務所を置いている建物は、「ふるさと館」という名前だが、これには色々な意味がある（図2）。自然再生や保全だけではなく、地元住民の今後のことも考えようという意味もある。「特定非営利活動法人上山高原エコミュージアム」という名前をつける時にも、どうしようかということで話し合いを重ね、色々な経過の中で進めてきた。初めの準備会の段階では上山開発促進協議会のメンバーが役員に横滑りするという話になった。若い人の中からは頭でっかちという声もあったが、その後は時間がたつにつれて解消していった。組織づくりというのは十分に深く考えなければならぬと思った。

ただ、この組織が生まれる前段では観光開発を目指していたのだが、それが出来なくなってしまったため、結局は方向性を示す県の指導に乗っかってきた。恥ずかし



図2. 上山高原エコミュージアムの拠点施設「ふるさと館」。

い話だが、そういう意味での努力は余りしなくてもよかった。このことが、結果的に良い方向に行くのか悪い方向に行くのかは今後の課題だが、良い方向に行くように持っていかなければいけないと考えている。

### 上山高原エコミュージアムの取り組み

エコミュージアムの具体的な活動は、平成13年（2001年）秋から始めた。一番初めは、上山が荒れているからそれをボランティアで草原に戻すということで、確か70数人集まってきた。まだ組織的にきちっとしていなかった時で、刈払い機も、燃料も、弁当も自分持ちということだったがかなりの作業量をこなした。翌年からは、作業をするに当たって会員を募っていたが、会員の中でも大きく分けて3つの考え方が存在する形で取り組みが進んできた。1つは、純然と自然を守りましょうという考えの人。次に、自然も大事だけれども、金は入ったとは言え、この土地を何のために売って今後どう生かすのかという考えの人。最後に、ちょうど中間ぐらいという人。今でも様々な意見があるが、互いにそれぞれの中身が大事だということが、だんだんと認識されてきた。自分の考えだけを強く言うのでもなく、だが主張しないわけでもなく、何か対立的になっている状況でもない。ただ、出発の段階で多様な考えがあって、草原に戻すときでも、もうちょっと木を切ってもいいんじゃないかという人もある一方で、ここはこういうところだから残しておこうという意見があり、特に、三角点に登る途中にあるミズナラの群落は、もっと切ろと言う人と、いや残そうと言う人があった。残そうと言うほうが多くて現在の形になったが、昔はあんなどころに木は全くなかった。上山で木が生えているのは谷合だけだった。

それから、丘の部分にある木はせいぜい私の背丈ぐらいの高さで、雪で押されて歪んで、火で焼かれて半分焦

げたような、でも枯れないでいる、そんな状態でぼつりぼつり生えていた。最初に述べた、当時の遠足のときは、集合場所から直線距離で1 kmぐらい、あるいはもっと遠くまでが見通せる状況だった。また、確か昭和60年（1985年）頃にはまだまだ草原だったが、山焼きをやっていたかどうかは分からない。

草原の維持のためには山焼きがやっぱり一番手っ取り早いし確実だと思う。ただ、山焼きで一つ困るのは山火事である。昔みたいに火をつけっ放しで放置できるというような状況ではない。法的な理由もあるが、今は周りの山が燃えやすい状況になっている。素人の私でも、杉林に火が入ったら少々の消火剤では消えないかもしれないと思う。それだけに、防火帯を作りきちっと延焼防止に努めていかなければいけないと思う。それから、大まかな言い方であるが、上山高原の東半分は水源涵養保安林になっているため火入れが出来ない。全く禁止されてはいないが、関係当局に相談すると「たき火なら結構ですよ」という回答で、「じゃあ、どの程度ですか」と問うと「直径10mぐらいだったら、たき火をしていただいてもいいですよ」ということである。それでは足りないが、間に合わせにということで火を入れている（図3）。だから、将来的には、何とか打開していただけたらと思う。

ただ、草原を機械で刈り払うことで良い面もあるが、植生の関係からいうと、例えば、現在はオミナエシの黄色い花がほとんど見えないといった影響がある。昔は盆前になると上山の上って、どの家でも多かれ少なかれ持って帰っていた。それが今は、ぼつりぼつりとしか見えない状況になっている。オミナエシが生えなくなったという話は、ハチ高原の人々も強く言っておられた。種子を蒔いて何とかしたほうが良いのではという考えや刈り払うタイミングを考慮するという考えもある。放っておいても再生するのではないかという思いもあるが、費



図3. 残雪と火入れ後の草原（写真中央上の楕円部分）。

用の面や地元の人たちの農作業の関係などを考慮していると、刈払い作業が時期的に後にずれ込んでしまう。刈払いのタイミングは今後の研究課題だと思っている。

また、草原維持のために放牧も良いが、今の放牧は山に上げたら上げっ放しで、電気柵を張って逃げないようにという形にならざるを得ない。そうすると水の補給が必要になる。水は重いから道路伝いにならざるを得ず、道路脇だけの放牧ということになる。牛は自分の好きな草から食べる。そうすると、植生が片寄った草原が出来上がってしまう。さらに、放牧密度の問題や保安林では放牧できないという問題もある。これらをどのように解決するのがこれからの課題になると思う。

もう1つは、ブナの植林についてだが、これからも何本か植えるという考えはある。ブナを植える場所は40～50年前に植樹された杉の間伐跡地の利用を考えている。杉林の一部は植えっ放しで放置されたものがあり、極端に根曲がりしたもの、雪で折れたものが多く建築用材として役に立たないものが多い。全体からいうと40%間伐で、列状に伐ってブナを植えた。最初に植えたブナは、初めのうちは生育がよくなかったが7～10年経た現在ではかなり長く伸びてきたので、そこそこ大きくなっていくだろうという期待をしており、成長のモニタリングをしている。植樹当初は雪で折れる、ウサギかシカなどが芯をカッターで切ったような形で食べてしまうなど、時間が経つにつれて木が短くなるという現象も見られた。でも部分的にはそうであったが、全体的には時間とともに伸びてくるので何とかなるだろうと不安を抱きながらも希望をつないできた。

ブナを植えるときに、ウサギに食べられないようにと網をかけるが雪に押されてしまう。雪を受ける面積が多くなるので、かえって腰折れの苗を植えてしまっているような感じがする。春になると取ってやらないと、中でモジャモジャとなって、蒸れて、木がいじけたりするという場面もあった。

ブナの植樹については、当初1年か2年は県の農林試験場においてご指導も賜った。それから畑ヶ平（はたがなる）の道路工事した土手のところにいっぱい生えているのでそれを採ってきた。直ぐに植えれば活着率が高かったかもわからないが、一旦畑に下ろした苗は活着率が非常に悪く非効率的であった。だが、その苗はたくさん植わっていない。次の年には種子を採った。ブナの木の下にシートを敷いて、こぼれないようにシートをつないでみたり、いろいろ工夫しながら実が落ちるのを待つ。採れた種子を水に浮かせて選別して、私も2,000粒

ほど預かり畑に蒔いた。発芽率は良いが雑草に弱い。ほかの農作業などに追われて、苗畑に行ったら苗が雑草に埋もれている。雑草を取っても日照りが強いと枯れてしまう。最終的には20分の1ぐらいになってしまったが、生えたものを使いましょうということで、それを1本いくらで逆に買い取って植樹の苗にしている。

植える場所は、県有地でも伐採許可が得られたところの杉を伐るのだが、可能な限り杉の育ちの良くないところを選んでいる。初めは10m四方のパッチ状で伐って何も生えないので、そのまま種子を播く、苗を植えるものなど、いろいろやった。種子を播いたのは駄目だった。むしろ、何もしないほうが他の木が生えてくるぐらいで、良かったか悪かったか分からない。ただ、10m四方という伐採面積は日照を考慮すると必ずしも良いかどうかはわからない。周りの杉は大きいから、もう少し枠の一边を大きくしておいたほうが良かったかもしれない。列状に伐って植えたところもあるが、むしろそちらのほうが良かったかもしれない。杉を列状に伐り倒すときは、なるべく今生えている木は傷めないように確認しながら行ったが、木を伐るのは危険な作業なので、危険を回避しようと思うと、どうしても今まで生えている木の枝を伐ってしまったたり、芯を伐ってしまったたりということはあった。それでも放っていると木は回復するので、ブナを植えるにしても最初に町有林で実施した時には木も草も全部刈り払った。刈って草も何もかも全部集積した。結果として良かったかはわからないが、草原維持のための草刈りとブナの植樹は今も続けている。草原化ができたのが37haと、ブナが1万本ぐらい植わっている。

上山高原エコミュージアムは5つの部会で構成されている。1つは保全部会で自然の保全を担う。2つめはサテライト部会で、かきもちや干しイモのように地元の食材を生かした何かを開発して作っていく部会である。3つめはプログラム部会で、年間かなりの数のイベントの全体的な計画しそれを推進している(図4)。4つめは調査・研究部会で、動植物の自然再生に伴う変化をモニタリングし、毎年2月末にモニタリングの報告会を持っている。植物の写真集もかなり分厚いものを作っている。5つ目はPR部会で、上山エコミュージアムの活動情報を外部に発信している。



図4. 環境学習で説明をする筆者。

### 上山高原の未来を考える

一番気になる課題は、一年一年というか一日一日、年齢が進むことである。生まれてくる子供が非常に少ない。20代から40代の方も非常に少ない。そういう中で地元だけで活動となると、一体何が出来るのだろうかという不安が残る。しかし、その時はその時で、また色々なことを皆さんの知恵もお借りして、我々も知恵を絞りながらやっていきたい。上山を今から13年前のような半分が林のような形にはしたくないという思いがある。

それから、上山が草原で残ってくれるということは地域の人にとって嬉しいことだが、それだけでは生活の糧にならない。現実的には、生活の糧になるような仕事を何かここで作り出したい。それを10年ぐらい前から言っていて、結果として、かきもち、干しイモ、シイタケ、茶、つくだ煮など、幾つかの製品ができあがっている。しかし、生産設備がないため実験的にやる程度のことしかできずコストも高む。量産という程ではなくても、効率的に作り出せるような方法はないものかと、行政にもお願いしたり、我々もあれこれと工夫しているが、なかなか補助金が付かず、これで上手くいくという話が聞こえてこない。でも何とかしたいという思いの中で時間が過ぎていく。

上山高原は昔は宝の山であったということ、今は昔の自然を取り戻し維持する努力をしていること、それを地域の活性化に繋ぎたいと考えているということを再び強調して終わりにしたい。

(2016年2月29日受理)